

榎田 2018for『樽川先生ご退職記念文集』（2579 字） 2018 年 1 月 7 日

題名：樽川典子先生との 3 つの思い出と「大学 の未来」

神戸市看護大学 榎田美雄（かした よしお）(kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

I. 筑波大学での院生時代

1989 年 4 月に筑波大学の大学院に入学したときには、樽川先生は、若手の専任講師でいらっしやった。もう 30 年近くまえのことなので良く覚えていないのだが、同期の柏谷至さんと私は、樽川先生の大学院の講義の最初の受講生だったのではないだろうか。筑波大学の大学院には、3 年 9 か月在籍したのだが、その間、アリエスやショーターをテキストとした樽川院ゼミに出続けたように記憶している。このときの読書のおかげで、アリエスが一筋縄ではいかない研究者であることを知った。たとえば、「世帯内での産児数の減少」が、一方的に「社会内での子ども化の進行」の原因となっている、とアリエスが言っている訳ではないことを学ぶことができた。結局、私は、家族社会学者にはならなかったが、樽川院ゼミでは、社会学一般に関するよい訓練を受けることができたと感じている。

II. 筑波大学での技官・助手時代

1993 年 1 月から、社会学研究室の技官になって、樽川先生とは、（最後の半年の助手期間を入れると）合計 3 年 9 か月を一緒に働かせて頂いた。当時の樽川先生は、全学の委員と学類や学系の委員をいくつも兼任していたと思う。たとえば、政治学の辻中豊先生と組んで、大規模な学生アンケート調査の企画や集計の仕事をしていた記憶がある。筑波大は、比較的大きな大学なので、この学内行政の職務は、かなりの負担だったはずだ。でも、面倒そうな様子を全くしていらっしやらなかった。大学教員生活をその後何十年かやってみて、当時の樽川先生の心意気が、やっと少し分かってきた感じがしている。

職についてからは「仕事は忙しい人に頼め」という格言を日々実感しているのだが、この格言がぴったり当てはまるのが、当時の樽川先生だったと思う。廊下から、小走りの「カッカッカッ」という音が聞こえると、端っこの A419 室でお茶をしていた副田義也先生と顔を見合わせて「ああ、樽川先生だ」と目配せしあうのが、研究室の日常だった。いろいろ相談にも乗って頂いた。技官・助手時代は、感謝するしかない思い出の時代である。

III. 育英会調査のスタッフ仲間としての樽川先生

時期的には、院生時代や技官・助手時代とも重なるのだが、その後の 1996 年 10 月からの榎田の徳島大学教員時代も含めて、樽川先生とは、長年「交通遺児育英会調査」「災害遺児・病気遺児育英会調査」および「あしなが育英会調査」をご一緒させて頂いた。このことに関連して私として書いておかなければならないと思うのは、榎田の自信作である（榎田 1996）論文、すなわち、「自損事故保険の社会学・序論」（『母子研究』17 号:63-73 頁）

の基本アイデアが、樽川先生のご発言等からインスパイアされたものであった、ということである。当時、樽川先生は、「自損事故の複合原因説」を唱えていらっしやった。つまり、「死亡に至る自損事故」というと、「自損」という言葉に引きずられて、運転者本人だけが過失を犯している、すなわち、運転者本人だけが原因であるかのように評価される社会状況だった。しかし、遺族インタビューと遺族アンケートの結果を精密に分析するのならば、実際の事故の状況には、探究がなされないまま放置されている他の要因が多くあり、諸事実を公平に勘案するならば、「職場での過労」という原因もあるとか、「道路の安全設備の不備」や「自動車の車体の剛性の低さ」という原因もある等、というべきケースが多々ある、ということが分かってきた。「他車の事故誘発的運転」が原因だったのではないか、と思われるケースすら複数件あった。樽川先生は、調査のポイントを適確にまとめて、そういう他の可能性を不可視にする“不当な命名”として、「自損事故」という名称はある、という主張、あるいは、「自損事故の実情は、むしろ複合原因事故と呼ぶべきものなのだ」という主張をなさっていた。ヒューマンエラーに関する社会学的分析の成功例として、学史に刻むべき、重要で真つ当な主張というべきだろう。その樽川先生の主張を、「自損事故救済制度が創設されたことは、それを災害被害者救済制度として考えれば当然だった」という議論に展開させて頂いたのが、(樫田, 1996)であった。論考掲載時には十分な御礼を述べることができなかつたのだが、ここでしっかりと謝意を表しておきたい。

IV. まとめー「多様性価値化社会」に必要な実務者型調整能力保持者としての樽川先生

樽川先生とは、樫田の徳島大学在職期間中(1996年10月からの16年半)は、科学研究費補助金での共同研究等が継続していたため、ずっと親しく交流させて頂いた。それに比較するのなら、最近の5年間、すなわち、樫田が神戸市看護大学に転職してからの間は、関わりの程度は減少している。けれども、看護大のような「半専門職養成機関」にいと、樽川先生がお持ちの「多様性活用能力」こそは、今後の日本の大学における研究や教育において貴重なものであると思われてならない。さいごに、その点に触れておこう。

後期資本主義時代としての現代は、人々を均一化させる傾向を持つ工業化というものが行き詰まって、イノベーションであること、多様であることがそのまま価値となる時代である。けれども、多様性が価値化される時代にこそ、ただの多様性とは異なる、多様性活用能力、すなわち、「さまざまな多様性を組み合わせてバランス良く活用する能力(実務者型調整能力)」が重要になる(この能力が不十分な大学人は、旧来の工場労働者養成的な、定型に嵌める教育をしてしまつて、反時代的存在となる)。樽川先生は、これまで調査研究チームの番頭の役割を多くこなされてきており、上述の「実務者型調整能力保持者」として、21世紀中葉の日本社会でますます活躍なさるべき方だと思う。この春で先生は、筑波大学をご退職になるが、新時代適切的な資質を持った人材の稀少さに鑑みれば、これからも、教育の世界および研究の世界において、つまり、大学と学界において、その能力を存分に発揮なさるだろう。続けて、ご指導いただければ、幸いである。